
うりと夏休み～雲罨～

ぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うりと夏休み〜雲野〜

【Nコード】

N7227B

【作者名】

ぬこ

【あらすじ】

梅の花が咲く中、素敵な春が過ぎせますように。

（前書き）

若干性的表現を含んでいます。

「まつ！」

「このちよつとしよっぱいのがまたっ！」

「うむ、実に旨い」

三月三日、雛祭り…って事でっ！

バアちゃんを作ってくれた桜餅、これがやけにうまい。

桜の葉っぱを塩漬けにしておいて作るらしいんだが、すごいよな
ー？

「うり、おめでとっ」

「うむ。うり嬢、これからも健やかであるよう」

「いやとー！」

桃の花の替わりに、舞い落ちてくる梅の花びら。

それがうりの頭の上にさっきから乗ったままなのが可愛い。

なんていうか、絵本とかであるような、タヌキが人を化かす時に
頭に葉っぱ乗せてるみたいな感じ。

思わず想像して噴出すと、雲野が声を掛けてくる。

「隼人」

「ん？」

「実にここの梅の木は素晴らしいな」

ジイちゃんが植えた、梅。

そして、そのちょっと離れたところには桜の木がある。

小さい頃何度がジイちゃんが漬けた梅酒をもらったことがあって、庭で取れたやつだと言ってたのを思い出す。

砂糖が何かにつけた、あまくてカリカリしてるやつ食べた事とか。

「梅酒、作れたらいいなっ」

「おお、それは実に素晴らしい。我は梅酒が大好物でな」

「お、そうなのか、それじゃ明日バアちゃんといっておそろわねーとっ」

「あーちゃ♪うэшしゅー？」

ほっぺたにピンクの粒粒をくつつけて、うり。

あーあ、あんこと餅か？で口の周りすっげえぞっ？

「うむ。うり嬢は梅酒は好きか？」

「う？」

「実に芳しい香りが喉をすり抜けて行き、それがもたらす酔いもまた格別なものなのだ」

「おおおおおお！」

「作り方を伝授して頂いた暁には、期待しているがよいぞ？」

「あいつー！」

…つて、雲野、うりと飲むつもりかっ！

のんびりと縁側に座って、梅の花が咲くのを見て。

天気は上々、風もなく、ほんとに春が来るんだなってなんだか嬉しい。

膝にうりを乗せてのんびりと桜餅を食って、茶をすする雲野。

そして、その側の座布団で丸くなって寝ている、えこ。

袈裟が余計に雰囲気でてるなーって、思わずじっと見ていて、なんていうんだろ？

「あ、絵みたいなんだ」

「ん？」

「う？」

そう、この風景が、なんていうか。

梅が咲いてて、天気が良くて。

穏やかで、くすくすって、なんていうか心がくすぐったくて幸せな笑いが浮かぶみたい。

「なんていうか、こう、春でいいなあって思った」

「うむ、春は良いな」

「ふあふあねー？」

上手くいえないけど、なんかいいな。

にっと穏やかに口の端を上げて、くすっと笑いながら茶に口をつける雲野。

ジイちゃんが飲ませてくれた梅酒、まだ残ってたなら飲ませてやりたいな。

あれ、すっげえいいニオイしてうまくて。

うりと、今夜三人で夜桜、ちがうな、夜梅？みながらつてのもちよつといいよな？

確か、でっかいカメみたいなやつの中に漬けてたんだよねー…何年も漬けておくっていったし、もしかしたら何処かにあるかも？

「よしっ」

「ん？」

「ちよつと待ってろ、俺イイモノ探してくる」

「我も手伝おう」

「うりも！」

「いや、任せとけっ、ヒミツのイイモノだから」

そういつて、にっと笑うと軽く方眉を上げて、同じようににっと笑う雲郢と、きょんとしているうり。

夏に出会って、冬を過ごして、初めての春。

せっかくだからうまいもの味あわせてやりたいし、驚かせたい。さすがにえこに飲ませるわけにはいかないだろうけど、うんっ。

夜の花見酒とか、ちよつとたまらないよなっ。

「では、楽しみに待とう」

「あいっ！」

「おう、待つとけっ！」

「隼人は、何を探しに行ったのであろうか」

「うー？」

「手伝いたい所だが、仕方あるまい」

「いくちゃ、いこねー」

小さな手で、私の頬をぺしぺし、と撫でてくれるうり嬢。

ひんやりとしたその手が心地よい。

胡坐をかいた私の膝元に丸くなって、隣のえこ殿と同じように横になっている。

「うり嬢もだな」

「あーっ」

ころんと上向きに、私の膝に体を投げ出して春の日差しが眩しいのか目を細める。

その喉元を撫でてやり、気持ちよさそうに目を細める、うり嬢。うとうと、と目を細めて、力が抜けたように手を軽く握っているのから察するに若干眠いのかもしれない。

春は曙、というのだからそれも至極当然。

隣で寝ているえこ殿の小さな寝息を聞き、こうして静かに春を味わう。

「うり嬢、少し昼寝をされるのも良い」

「いくちゃ、ねう？」

「こうしてうり嬢が眠りに付くまで頭を撫でていよう」

「うしししっ」

私の袈裟の端を掴んで、額を摺り寄せてくる。

その小さな頭を撫でて。

もっじき夕方の風も吹いてこよう、その冷たい風がうり嬢のまどろみをさますことのないように、袈裟で体を覆う。

そして、小さな寝息が聞こえ始めた。

こうして、膝に誰かの眠る体温を感じるのは、いつ以来だろうか。春の、この時期。

刹那に吹く風に舞う花びらに、過去を想う。

「アケミ、っていうのよ」

「良い名だ」

「カタカナでアケミ、源氏名かって言われるけど、ほんとにそうなんだもん仕方ないわよねえ」

そう言つて、煙草の煙を吐く、アケミ。

「だからアタシの事は、アケミ、でいいからね？」

「了解した。我の事も、雲野と」

「ケイ君、って呼んじゃダメ？」

「構わない。アケミが呼びたいのなら」

足の指に、染色を施しながら、大きく口を開けて笑う、アケミ。
柔らかな明るい栗色の髪がゆらゆらと揺れて。

小さな部屋に、太陽の光が僅かに入り、それが煙草の煙に反射するように一筋の光を作っている。

その光の筋がアケミの体の線をあらわになぞっているのをじっと見つめて。

「いやよう、体キレイじゃないから恥ずかしいわ」

ここに来て、名前を互いに打ち明けるまで二日。

窓を開けても空気が悪いからね、と常時換気扇を回したままの部屋。

成人する前に、一度は家を出る決まりの、我が家。
物事を知り、成熟し、そして修行に。

何度か繰り返し返されるこの決まりの間は家に戻る事は叶わぬ。
甘えを捨てると同時に、世間というものをその身を以って知れと
の計らい。

修行とは、素業かと、我は解釈。

思う事も多々あり。

ならば、故に。

縁故ある所を頼るのではなく身を磨くべく先の先を探して歩くが良
からうと、歩き。

「ねえ、ほんとに大丈夫!？」

「うむ、心配頂きたじけない」

「ちよつと…もう…あんた、家どこ？」

車に、接触され、川に落ちた荷物を拾うべく川に入ろうとした時
の事。

行過ぎる人の流れに逆らうように、我の腕を掴み。

「家は、今は戻るわけにはいかぬのだ」

「ああもうっ、じつとしてて、荷物なら拾ってきてあげるから!」

「いや、そうはいかぬ。水も冷たい」

「だからアタシがいくんでしょ、いいから座って!」

止める間も無く、上着を脱ぐと川に入り、我の荷物を拾い上げ戻
ってきた女人。

薄絹を重ねたようなあでやかな衣装が、春も早い時期にはやや不似合いではある。

それが、冷たく汚れた川の水に濡れ。

「申し訳ない、がそのままでは身体に悪い。これを」

「いいから先にあんたが暖まりなさい、大丈夫!？」

言葉を遮ると、私の身体を袈裟をまくりあちこち点検する。その濡れた冷たい手の指先は、色とりどりに塗られた爪。それまでもが冷たく、汚れた川の水に汚染されている。

「病院いくわよ、救急車呼ぶから待っててね!」

「いや、それには及ばん。掠っただけだ」

「ほんとに大丈夫!？」

「うむ。申し訳ない」

立ち上がって見せると、ほうつと溜息をついて。

ぶるつと身体を震わせると、私の腕を掴む。

脱ぎ捨てた上着を羽織り、荷物を持つと、

「わかったわ、それじゃ行くわよ、おいで」

「何処に?」

「いいから早くっ! 安心したら寒くて居られないわっ」

と、ちらちらと横目で此方を見ながらも行過ぎる人の群れの中を走り出す。

掴まれた腕から伝わってくる体温が、冷たいものから徐々に温かくなり。

掴んでいた腕は、手の指になり。

そのまま、ひたすらに走ってたどり着いたのが、この部屋だったのだ。

「ところでさ、ほんとに大丈夫？」

「うむ、大事無い」

「ならいいんだけど、じゃあ、悪いけど先にシャワー使うね？」

「当然の事…しかし」

見知らぬ女人に助けられ、寒空を逃れ部屋に。

とはいえ、妙齢の女性の部屋に、というのは無礼ではないだろうかと気がかり。

…が。

「あ、ストーブはつけておいて。エアコンないのよ、ごめんね」

「いや、そうではなく」

「寒いから話はあとっ、すぐ出てくるから！」

「…了解した」

せめて、床を汚さぬよう。

6畳程の小さな部屋に置かれたストーブに火をつける。

…が、火がつく気配は無い。

壊れているのか、と見てみるが、異常はないようだ。

「あー、あつまつまっ！早く、あんたも入っておいでっ！」

「む、かたじけない。ストーブに火を入れられないのだ」

「…あ、灯油買ってないんだっけ…やだなー、ごめんね」

柔らかかそうなゆったりとした服を纏って出てきた女人がストーブを見て言う。

そして、忙しく部屋の中を動き回ると、差し出すのは白いタオル。

「はい、これ使って？」

「む」

「着替えは、これ貸してあげるから」

「いや、我は」

世話になり、この上湯を使わせてもらうなど。

名も知らぬ、見知らぬ女人に世話になるわけにはいかん。
改めて出直し、然るべく礼を尽くさねば。

「早くっ、電源つけたままにしてあるから勿体無いのっ」

「しかし」

「とにかく入ってきてっ！あその川ほんつと汚いんだから、体
中臭くなるわよ？」

「いや、それはかたじけない。早々に退出を」

「もう、仕方ないわねっ」

「な、なにをっ」

問いかけるが、有無を言わず我の濡れた袈裟を捲り上げる。

「いい、脱がされるわよ？嫌なら早く入ってきなさいっ」

「む…了解した」

「そしたら、その洗濯機の中に入れちゃって」

「そこまで世話に」

「いーいーからっ！早くあつたまってきてっ！アタシ寒いのっ」

我が脱衣所へ向かうのを見届けると、そそくさと炬燵に潜り込む。
冷たく濡れた袈裟から、川の汚れた水の臭いが鼻に付く。

それを言われた通りに洗濯機の中に。

そして不透明な硝子のような素材の引き戸を開けて、湯殿へ。

「……しかし」

蛇口を回し、シャワーに切り替える。

噴出す湯に身体を清め、その心地よさに溜息が漏れる。
とはいえ、早々に済ませなくては、かたじけない。

「ねえ、珈琲とお茶どっちがいい？」

扉越しに掛けられた声。

「む」

「ミルクあるから、珈琲でいい？」

「うむ。だがしかし」

「じゃ、早めに出てきてね」

言いかけて、開いた口の中に湯が入る。

軽く濯いで吐き出すと、今一度身体を清める。

確かに温かい飲み物は非常に有難い、が、…良いのだろうか。

脱衣所へ戻り、先程渡された白いタオルで身体を拭う。

用意してくれた着替えを羽織り、それがバスローブである事に気がつく。

若干着丈が小さいのは、女性用であるからだろう。

「かたじけない」

「おかえりー」

小さな炬燵の上に乗せられた、マグカップ。

寒そうに上着を羽織ながら視線でそれを我に勧めてくれる、女人
頂いてよいものか、と一瞬躊躇うが、良い香りに誘われ向き合う
ように炬燵に。そして、それに手をつける。

「…旨い」

「いいわよねー、寒い日に温かい飲み物って」

「うむ」

「あ、砂糖いるならその棚にあるからね？」

「いや、このままで良い」

ずず、と音を立てて啜り、目を細めるのがテーブル越しに見える。
窓の外からは日の光が差し込んでいるが、外の風の冷たさはその
音から推して図るべき事。閉じられた窓の隙間からの冷気を感じる
ような気さえしてくる。

この、あたたかいもてなしの後には、早々に退出せねば。

湯をつかわせて頂きつつ確認したが、身体に異常はないようだ。

実にありがたい心遣いに

「ねえ」

「ん」

——と、問いかけられる。

眠そうに目をこすり、それでも何やら考え込むような仕草。

「おなかすいてない？」

唐突に聞かれる言葉に、空腹を思い出す。

言われてみれば、なにか食物を摂ろうと思いついていたのだ。

「確かに。宜しければ礼も兼ねて何か」

「じゃ、一緒に買いに行く？」

「希望があればそれに沿って」

「鍋、したくない？」

やや、会話が噛み合っていないような気が、する。

鍋は確かにこの時期に最適だ。だが、「買いに行く」と、「鍋」ではまた此処に戻ってくることに、共に食事をと解釈してしまう。

「それは」

「鍋のあとに、うどんとか入れるよね？」

「…うむ、それもまた良し」

「他にも何か入れるの？」

問いかけられて。

「飯を入れて、葱と卵で軽く蒸らし、雑炊にするも良し」

「あ、それいいな。でも、アタシみじん切りできない」

「それなら我が」

と、言いかけて。

まるでこの後も部屋に戻って夜餉を、との誘いを申し出ていると気がつく。

この時間から買い物に出かけ、それから鍋では時間も遅くなる。一人暮らしと見受ける女人の家に、素性も知れぬ男が訪問というのは好ましくない。

「やってくれる？うれしいなあ」

「では、改めて出直した暁にでも」

思い、そう言つと首をかしげる、女人。

「今夜は？」

その言葉の意味することを、考えて。

所望されているのであればもてなしの礼に応えたい。

その後にもまた出直す事にすればよいだろう。

「では、失礼でなければ我がみじん切りを」

「助かるつ、じゃ、アタシご馳走してあげるから買い物行こ」

「いや、それでは礼にならぬ」

「なんの？」

「もてなしの礼だ」

また、軽く首をかしげ。

「こうも世話になり、夜餉までご馳走になるわけにはいかん。女人の家に遅くまで滞在しては失礼になる」

そう言つ我に、

「でも、服まだ洗濯してないし、乾いてない」

「しかし」

「それに、外寒いし。中でこんなに寒いもん、いいんじゃない？」

「確かに、寒いが…」

「予定とか連絡あるならしたほうがいいけど」

そう言つて、二杯目を継ぎ足してくれる。

予定は、ない。

連絡もとる予定は未だ、ない。

「恐れ入る。無礼を承知で尋ねたい」

「ん？」

「我は――」

と、言葉が繋がらない。

何を問えば良いのだろうか。

このままに、今夜一宿を貸して頂けると言う事なのだろうか。

「あ、朝ごはんはパンよりご飯っていいたい？」

「む」

「ん？違う？」

心を読まれているのだろうかと思ひ、ふと躊躇う。

確かに朝はそうありたいと思うが、それ以前の事ではないだろうか。

「今夜、一宿の恩にありつけるということと解釈して良いのだろうか」

そう、口に出して。

驚いた様子もなく頷きながら残っていた珈琲を飲み干すのを見る。身体を伸ばして一つ大きく欠伸をすると、部屋の中を見回して立ち上がる女人。

今の返事は「諾」と受けて良いものなのだろう。

「どれがいいかな」と呟きながら次々と服を出して、その度に我を見て。

「うん、これしかないからこれでいいよねっ？」

「世話になつてゐる身で僭越だがそれは無理だ」

差し出されたのは、長い黒の皮のコート。

金属の鎖があちこちについており、有事の際には便利かもしれないが女性用だ。

大きく開いた胸元を繋ぐ金属の飾りは、我が着用してはその意を為さぬだろう。

「んー、じゃあ」

用意された服を借り、二人で買い物を買ませせて。

騒がしい通りの一本裏にあるこの部屋では夕刻を過ぎたところに活気を増し、通りも明るくなる。

独特の匂いが漂い始め、街頭に明かりが灯され。

「あー、君、年いくつ？」

「二十歳を回ったところだ」

「なら、お酒飲めるよね、よかった」

既に手に提げた袋の中には酒が幾つか入っている。

隣に立つ彼女。

身長は私の肩よりも下に頭を並べ、柔らかかそうな髪がその背を滑り落ちて。

年長なのだろうと推測するが、女人に年を聞くのは無作法である。

「…って、アタシも二十歳っ！」
「そうであつたか」

またしても心を読まれたかと思つたが、私の視線のせいかな。

「なのは、15年も前の話よっ」

「そうか」

「そうよー、…って、敬語じゃなくていいからね？」

「了解した」

くすくす、と我を見て笑うとまた部屋でしていたように背を伸ばす、彼女。

その髪が電飾の明かりに照らされて一層明るく見える。

通りから裏に入り、彼女の部屋への階段を上る途中で、思わずふれた手摺の冷たさに改めて冬を思う。

年が開け、春も間近とはいえどもこうして肌に触れる空気は冷たく。

ましてや、川の水は如何ほどの冷たさであつただろうか。

「あ、明日さ」

「ん」

「予定、ある？」

「いや」

カタ、と乾いた金属音を立てて部屋の前の郵便受けを確認する彼女。

鍵を空ける間だけでも荷物を持とうかと手を出すが、笑って首を振る。

先ほども買い求めたものを適当に分け、持とうかと手を出すも断

られた。

「出来る事は大丈夫、出来ない事は任せるね」

そう言つて、数本の酒が入った袋を彼女が持ち。

野菜や米類が入った袋を我が持ち。

「じゃあさ、明日夕方7時にあの橋の先にいてくれる？」

「了解した」

「それまで、家で好きにしてて」

「…良いのだろうか」

「晩御飯、みじん切りにしたたまねぎ入れたハンバーグが食べた
いな」

我が手にしている袋の中には、一人分には多い量の肉と、玉葱と。
そして、明日一日では飲みきれないであろうと推測される茶葉と、
湯飲みが二つ。

「我が、出来る最良の物を作ることを約束しよう」

「うれしいなー、楽しみにしてる」

そう言つて、笑うとドアを開ける彼女。

後に続き室内に入り、漂ってくる香りが既に何故か懐かしく、安心
することに気がつく。

帰り道の途中で彼女が「ここのコロッケは絶品なのよ」と示した
肉屋を曲がり、「ここの魚屋の猫はタマっているの、王道よね？」
と頭を撫でてやった猫のいる魚屋。

その先に出会った橋があり、そこを曲がることでここの部屋に辿
り着ける。

「明日、仕事昼からだからさ」

「では、我が一宿頂いてしまつては」

「ううん、鍋は一人じゃつまらないでしょ？」

荷を降ろし、出かける前に散らかした服をしまいながら彼女が言う。

「客商売だから、毎日楽しいことがいつこあると嬉しいじゃない」

「うむ」

「…つてさ」

「ん」

しまいかけた服をもう一度出し。

それを自分の胸元にあててみせる彼女。

煌びやかで薄絹が目立つその服は、可憐ではあるがこの時期には防寒効果は薄いだらう。

「面白いね、君」

「何故に？」

「仕事とかも、何にも聞かないんだもん」

そういえば、未だ何も知らない。

彼女の年齢は、先程教わったが、仕事も、名前も。

然しながら逆に言えば彼女から聞かれたことも、先程の年齢のみなのだが。

「さつき逢った橋超えたところ。アタシの職場はそこなの」

「すまない、この地域に明るくないのだ」

「ありがとう」

と、笑う。

謝礼の理由がすぐには頭に浮かばず、考えてみる。

夜になると一層明かりを灯し、独特の匂いをさせているこの街。薄絹の衣装を纏い、橋の先の職場といわれて推測できるのは。

「そんなかんじ。出来たら橋まで迎えに着てくれたらうれしいな」
「先程から思っているのだが、——心を読めるのだろうか」と
「言ったでしょ、客商売だからって」

また、楽しそうに笑う彼女。
その肩に髪が揺れ。

「出来る。明日夕方7時に、了解した」

うれしいな、と言う様に。
目が語っているのだと気がついた。

「ほんと、上手。こんなにおいしい雑炊食べたの初めて」
「そう言って頂けると実に喜ばしい」

二人で小さな炬燵に座り、鍋を挟んで酒を飲み。
手がけた雑炊を大層気に入って、食べ過ぎたと言いながら笑う彼女。
女。

先程見せてくれた薄絹は黒い大きな鞆にしまわれ、商売道具だと出してくれた大きなリボンを我の髪に結び。

「頭の形、いいねー？」

「もうじき髪をそり落とさねばならぬがな」

いずれ、成人したと認められた暁には髪を落とすのが決まりである。

誓う事を込め、後ろ髪を引かれること無き様に。

「うん、でも似合うよ。形キレイだもん」

「感謝する」

気がつけば、会話と、窓を叩く風の音と。

他に何も遮る音がない。

窓の外の喧騒の声が風の音に混ざり時折聞こえてはくるが、それすらも違和感を感じることなく。

「さてと、食べたら寝よっか」

「では、我は後始末を」

「いいの、それは明日朝アタシが出来る」

「しかし」

鍋の縁をつかみかけた我の指と、それを止めようとした彼女の指とが触れる。

そのまま、軽く我の手を撫でるように叩き、いいなあ、と漏らす。

「手、温かいね。取って食ったりしないから、おいで」

「しかし、女人と同衾とは申し訳ない」

「炬燵で寝るの？風邪引くよ」

いとも容易くそう言つと、ベッドにもぐりこむ彼女。

確かに炬燵で寝ては風邪を引くと言うが、妙齡の女人と同衾する

という事実は彼女に悪評判をもたらしてしまうのではないだろうか。
傍観者がいるわけでは無い、が。

「誰も見てやしないって、手繋いでねよ？」

「我を気遣って言うてくれているのであれば」

「ちがうよー」

「妙齡の女人と同衾することは、貴女に」

そこまで言いかけて。

彼女が口を開いたのを見て、思わず口をつぐむ。

「もし、君が望まないなら、強制はしないつもりだが……って、
似てる？」

そう言って、笑う彼女が布団を捲って見せる。

ここまで世話になり、さらに寝具までというのはさすがに気が引ける上に。

「我は、修行僧の身ではあるが、男でもある故」

「あ、修行僧だったの？」

あつさりと言われ、今度は我が驚きを隠せない。

修行僧であると認知し、であるが故に危機感を感じることなく部屋にと言つ訳ではないらしい。

ならば。

「うむ。で、あるのならば——と、もうしばし話をとめたのだ
が遅くなつては明日の仕事に差し支える。早々に眠られよ」
「じゃあ」

と、彼女が我を見る。

ひらひら、と手を伸ばし、布団の中へと戻し。

また小首を軽くかしげると、ゆっくりと目を閉じる。

「では」

声をかけて、立ち上がる。

「隣を許されよ。快眠を阻害してしまうかもしれないが体温は保障する」

「うれしいなあ、誰かと眠るのって落ち着くんだもん」

そういうと、目を閉じたままの彼女の手を握る。

我の手よりも、二周りほど小さく。体温の低い手。

「嫌だという理由は我には何一つない。良い夢が見られるよう」

「ありがと、君も、いい夢みてねっ」

と、静かな呼吸音が規則正しく聞こえ。

繋いだ手のひらからほんの僅かずつ力が抜け、軽く握られているのをただ感じ。

ただ、その伝わってくる体温と脈動を思いながら今日の出来事を振り返ってみる。

車に接触したとはいえ、誰一人何を言うでも、するでもなく各々の時を刻んでいくのみの出来事。

そこに、現れた柔らかい髪の薄絹の女人。

腐臭の漂う川に迷うことなく入り、見も知らぬ人物の荷を拾い上げ、こうして部屋にてもてなしを施し、さらには一宿一飯の恩。

年の頃は、三十五。

ふと、視線を隣に移すと外から漏れ入ってくる光に、睫がその頬に影を作っている。

見知らぬ同士でありながら、こうして同衾し。

先程買い物を済ませ、部屋に戻ってきたときに既に懐かしさを感じたのは、居心地のよさからなのだろうか。

「眠れない？」

不意に、隣から。

なるべく起こさぬよう、身体を動かさないようにしていたのだが、やはり眠りを阻害してしまったのか。

「すまない」

「ううん、アタシじゃなくて」

「我は——問題ない」

「そっか。じゃ、おいで」

「ん」

おいで、と呼ばれ。

不意に顔を其方に向けると、その手のひらで髪を撫でられる。

さらさら、と耳に音が心地よく響き、視線の先の彼女は穏やかに微笑んで。

「最初は、コスプレしてるのかと思った」

「コスプレ、とは？」

「だって、袈裟着てるのに髪の毛あるんだもん」

「では、次からは傘を被るとしよう」

また、くすりと笑って。

一度その目をゆつくりと瞬かせると、我を見上げる彼女。左の頬の上に僅かに傷跡が見えるのは、古傷なのだろう。

「家に、帰りたいって思ったりしない？」

「今は修行であるが故に」

「そか」

「うむ。帰りたいと、思われるのか？」

聞かれた言葉に問いかけて。

ふと、考えるように頭を上げた弾みで揺れる彼女の髪から、柔らかな香りが漂う。

先程湯殿で使わせて頂いた物は同じでも、私のそれとは、違う。

「もう、十年以上たっちゃった」

そう言って、また笑う。

「ねえ、君はこうして女と、一緒に寝るのは初めて？」

「うむ」

「そっか。悪いことしちゃったね」

「何故に？」

「ロマンスも何にもないじゃない？」

「十分だ」

こうして、体温を感じて眠るのは初めてだ――が、不満など、何一つとしてない。

何より、今までに女人との出会いはあったがそれを望んだことなどなかったし、今こうして共にいることに心地よさを感じているのは紛れもない事実だ。

「うれしいなあ、ありがとう」

「礼を言うのは我だ」

「もうちょっと、こっち、おいで」

と、我の髪を撫でていた手を引き寄せる。

そして、彼女の腕が、我の首元に寄せられ、ふわつとした香りが我を包む。

「一つ、尋ねても良いだろうか」

「なあに？」

「抱くのは、男ではないかと」

「ふふ、いいじゃない？何となく、そうしたかったの」

そういつて、胸元に頭を引き寄せられ、その手で髪を撫でられる。我の概念では、そうして慈しむのは男の役かと思っていたことを今更ながら実感しつつ、それが心地よい事なのだと知る。

それと同時に、我も、そうしたいという欲求を感じるがそれがどういうものなのかは図りかねて。

ほんの少し、身体を向け、手を伸ばす。

同じように髪に触れ、それを撫で。

髪に体温があるとは思ってもいなかったが、手のひらに、指先に温かさが伝わることに驚く。

それが、心地よいという事にも。

「優しい手してるね」

「そう言われるのも、初めてだ」

「夜のこの時間って、魔法みたいよね」

「ん？」

「朝になったら、覚めちゃうかもしれない。覚めないかもしれない。だけど、凄くこうしているのって幸せだからさ」

言われて、考える。

朝になれば、太陽の光が差し込み日常の勤めを果たさねばならない。

それが気持ちを変えろということなのだろう。

確かに、先程明るいうちに感じていた感情とは違うものがあるのを実感するが、それは共に過ごした事の多さと共に生じるものなのかと思っていた。

「幸せと、感じてくれるのならば」

「んー？」

「それが、我にも喜ばしい事」

「うれしいな」

「明日の仕事の予定を知りつつも、こうしているのが心地よいのでつい、時を過ごしてしまいそうになる」

やはり、彼女の目が、語る。

心を読まれている気がすると感じたのは、こうして我の目も語っていたのだろうか。

無言で交わる視線が、ひどく饒舌だ。

声に出して伝えるには適度な言葉が見つからず、いくつ言葉を連ねればこの一瞬に勝る感情を伝えられるのだろうか。

部屋の電気を消しても尚入り込んでくる外の明かりが、彼女を照らしている。

その瞳に映る我を見るからに、彼女の瞳にも同じように我が映っているのだと思う。

「明日も、いなよ」

「それが、迷惑にならぬのであれば」

「行く所、行かなくちゃ行けないところ決まるまで、いなよ」

「修行であるが故に行く先は私の思うように。しかし」

「んー？」

「このように、快適で心浮き立つては修行になるのだろうかと思うが」

「うん」

「手を離すことが、難しいのだ」

また、目が語る。

笑みを浮かべた彼女の手に、力がこもる。

「離したいと望まれれば、従うが」

少なくとも、今はそれに従うのには辛いかもしれん。

しかし、更に時を重ねればそれは殊更ではないだろうか。

ならば今望まれるのが良いのだろうかとも思うが——判断がでない。

それでも、彼女の手に込められた力が、体温が。

——今は、望まない、と解釈しても良いと言っているように。

「一つ、尋ねてもよいだろうか？」

と、彼女。

「君は、全部初めて、でいいのかな？」

一つ、気がついた。

こうして、口調を真似て問いかける時というのは未だ残る緊張感と、それに気がかりになる事を問う時だと。

それでいて、思うことを伝えるのに一つ、おいてくれているのだと。

「うむ。唇を合わせた事はあるが、儀式的な物と思っていた」

「儀式？」

「契約を交わしたのだから、それも通過儀礼の儀式かと」

「あははは、面白いよそれー！」

関わりを求められた事はある、が。

それを受ける受けないに関わらず欲求を告げられるのも、何処其処に付き合いを伴われるのも、契約故に仕方のないものなのかと。

「じゃあ、儀式的な物かと思っていたって、過去形は？」

「契約を交わしていないにも関わらず」

そう、我は欲している。

目の前の女人と唇を合わせたいと。

ひたすらにこうして体温を感じ、そのまま眠りにつくことを。

「きつと、今するキスは」

私の目が、語っていたのだろう。

彼女が、ゆっくりと開く唇からつむがれる言葉と、それを補助するかのように語る瞳。

「鍵になっちゃうね？」

鍵とは、と目線で問いかける。

「始まりの、鍵。そして、修行の妨げの——」

「無論、望まなければ引き下がろう」

「君は、望んでる？」

「我は——」

それは、——と、言葉を紡ぎかけるが言葉にならない。

一瞬、穏やかに笑い、そして、じっと我を見つめてほんの僅かに唇を開く、彼女。

私の髪を撫でていた手が止まり、同時に私の手も、止まる。

饒舌に語っていた目が、語るのを止め。

一度、ゆっくりと閉じると、また開く。

許可を、と思うが、彼女は我に問うた。

契約はまだ結んではない。

互いの同意が無くては——と、気づく。

私もまた、意を伝えていない。

「我は、望む」

「なら」

また、黙る彼女。

じっと見たその目の言葉は。

「私の、勝手な解釈で良ければ」

無言で見つめられる。

その、視線の言葉は、答えは。

ふ、と僅かに顎を私のほうに上げる彼女。
その微かに開いた唇。

契約等、交わしていない。

それでも、外の漏れ入る光に照らされた彼女の唇に、私は唇を寄せた。

温かな体温と柔らかな感触は、今までの「通過儀礼」とは程遠く。

このまま、眠りにつけることを至上の喜びと思っていた先程までの我を淘汰していくが如く。

「君は、温かいね」

そう、一度唇を離れた彼女が言う言葉。

「明日が仕事だと聞いて、それを気遣いたいと思うのだが」

「うん？」

「我が――」

口を開いてしまつては、彼女を求めてしまいそうで。

今までに感じたことの無い感情にどうしたらよいか戸惑う。まるで、熱病に浮かされるかのようにだが、不愉快というには程遠い。

「寒い？」

「ん？」

「寒いなら、もっとアタシのそばに、おいで」

彼女に触れた手が、ほんの僅かに彼女の身体から離れるだけで外界とは違う物足りなさを訴えている。

彼女の体温から離れ、寒いのだと。

明日を気遣わねばならないとは頭でわかっているけど、それでも尚

「我は――」

彼女の胸元に抱きしめられ。

我の両の手が、腕が、同じように彼女を抱きたいと訴える。

「同じように、して、おいで？」

あわせた視線で読まれているのだろうか。

それでも、彼女の声が、救いのように我の耳に。

許可と受け手を伸ばし彼女の髪を撫で、腕で彼女を抱く。

我の胸に彼女を。

柔らかな髪に触れ、そして温かい彼女の身体を、我に重ねるように。

僅かに早く打つ鼓動が重なり合った衣服ごしに伝わってくる。

「眠い？」

胸元で尋ねる彼女の声。

眠くなど、ない。が、彼女の翌日の仕事に差し障らないかと、答えに躊躇う。

「君は、このまま眠りたい？それとも」

そう言つて、顔を上げ、我を見る。

その唇が、我の唇に重なる。

言葉を返そうかと開いた唇をなぞる彼女の指を、軽く噛んで。

伝えていいのかわからない欲求を、彼女に目で告げる。

「ずるい、アタシが聞してる」

「しかし」

「初めてがアタシじゃ、つて。修行の邪魔して、おまけにこれでいいのかって」

「これ、とは？」

「15も年が違う、風俗嬢」

一度、視線を伏せる彼女。

自ら口に出した言葉に感じるものが多かったのか、伏せたままの瞳と、僅かに力を抜く彼女の手のひら。

我が思ふことよりも、沢山の事を彼女は考えていたのだと、今更ながらに気がつき。

こうして許可をとろうとすることは、同時に彼女に少なからず気鬱の種かと思ひ、我の迂闊さに腹が立つ。

「では」

「ん」

「我は、拒否されているとは解釈せず。望むままにさせていただ

く

「いいの？」

「我が、そうしたいのだ」

じつと見つめる彼女。

「嫌と思わばそのときに示せ」

そう告げて、再び唇を寄せる。

そして、そのやわらかな首筋に。漂う彼女の香りが我を包み、それを更に追求したいと願って。

無言で私の首に腕を回す彼女の鎖骨に唇を這わせ、その先を妨げる布を静かに寄せ、そこから描かれる滑らかな曲線をなぞる。

「着ていない方が、温かいね」

「それは、何よりだ」

くすつと笑う彼女の耳元に再び唇を寄せ、吐息を肌で感じる。

温かく、何処も彼処も柔らかく。

唇を寄せれば、応えてくれる様に。

指を這わせれば、それはとても滑らかで。

両の腕に力を込めて重なる体に伝わる鼓動が徐々に早くなっているのだけが、只時を刻むように。

「君のキス、好き」

「私も、それが此処まで良いものだとは思わなかった」

「好き？」

「無論」

瞳を開いたままで、互いに見つめあいながら再び唇を合わせ。

そして、どちらからともなく瞳を閉じ。
再び、唇を絡ませては瞳を開け、抱きしめる。

彼女の全てを感じたい。

体温も、その柔らかさも、滑らかさも。

只其れだけが脳裏にあり。

愛しいと感じる。

反応を返してくれる事が、腕を伸ばしてくれる事が。
柔らかな双丘に顔を埋め、漏れる吐息を聞く事が。

それが此処までも、だとは。

素肌に触れる肌の感触に、かつてない幸福感。

触れている箇所から流れ込んでくるような感情を、更に切望する。
故に、抱きしめる。

「来て」

そして。

心地よい眠りから覚め、名を告げあい。

肌を合わせつつも、既に二日と互いに笑い。

仕事に出たアケミを想って、半日が過ぎ。

見回す部屋の、やや殺風景な事が、時折見せる寂しげな顔に意図するところがあるのか等と思い描いては思考を止め。

時間になり、アケミを迎えにいくのに、彼女の昨夜の道案内を思い出し。

同じように猫の額を撫で、実に彼女らしい道案内と思い、又それがあの橋までの道を如何にわかりやすく説明しているかを、嬉しく思い。

こうして、迎えに行く事を思つて、伝えてくれたのだろうかと思うと、それが心浮き立つ程に喜びを感じる。

「アケミ」

橋の向こうにその姿を見つけ、名を呼ぶと。

嬉しそうに手を振り、隣に居た女人に笑顔で何事か応え、私の元に走ってくる。

昨日川の水に入った箇所を超え、私の腕にしがみつく様に。

「ケイ君、来てくれてありがと、うれしいなあ」

「私も嬉しい」

「明日、休みだから飲もうと思って店から持ってきた」

と、幾つかの酒の瓶を見せて笑うアケミ。

良い事なのかと思いつつ、その笑顔が愛しくて、思わず髪を撫でて。

「ありがたい。我からも所望通りの夜餉が出来ている」
「うれしいなー、楽しみで、どうしよう」

二人で猫の額を撫でて、部屋に戻り。

また、郵便受けを眺めて、何も入っていないその扉を閉じて。

やはり、此処に戻ると懐かしさを感じる。

ほんの僅かな間だとしても、此処を離れ、戻った時に感じる其れが妙に身近に感じて。

出合った時に蕾だった梅の花はほころび始め、花も満開の頃まで後僅かとなり。

アケミを迎えに行く度に香る通りのそれが、街の独特の匂いを消し、未だ寒さの残る中に早い春の訪れを伝える。

気の早い春一番に吹かれて散る花びらが繋いだ手をなぞり。

うれしいな、と重ねた手の上にひらりと舞うのを、柔らかな唇で捕らえ、含む。

「初物食べると7年寿命が延びるんだって」

「うむ、聞いた事がある」

そう言うっては含んだ花びらを我に。

「夜の梅も美しかろう。白い花びらが夜に冴える」

「花見かあ、いいな」

共に帰り道に花を眺め、互いに笑いあい。
それが幸せなのだ——と穏やかな日々に、眩暈がしそうな程、感

じ入る。

——時折彼女が見せる、憂いの表情の意を知らぬままに。

「ケイ君」

「ん」

「…なんか、いいね、こういうの」

アケミの伸ばした足が我の膝に触れるほどの小さな炬燵に向き合
い、夜餉を。

風呂上りの素肌が、昼間のそれとはまた違う。

時折見せる憂いの目は、何も語らずに視線が絡むたびに表情を変
え、「幸せだ」と告げては何かを隠す。

憂いの種になるものを、取り除ければ、と思うが互いに踏み出せ
ずに居る事があるのを感じる。

このまま、永久の時を過ごすには、我もせねばならぬ事がある。
修行半ばの身であり、故にアケミに世話をかけているのは事実だ
ろう。

こうして、多くを語らぬまま「今」の互いと過ごす時は、幸せで
もあり穏やかでもあるが僅かに残る憂いの種になるのではないかと
然るべき修行を終え、改めて礼と、契約を——と思い、視線が絡
む。

「…ケイ君の、唇、好き」

こうして唇を重ね、言葉を交わしても。

そうしていることだけが、全てだと互いに目をつぶるように。

「この時間の魔法」が解けてしまうのが、怖い。

そう思いつつ、核心に迫る言葉を返せず居るのは何故なのだろうかと脳裏をよぎるが、意図的にそれに目をつぶる——その理由さえも、言葉にならないが故に。

「アケミ」

「ケイ君？」

憂いを隠す唇を、奪う。

問いたくなる言葉を塞ぐ様に、漏れ出でるのを防ぐ様に。

時折語りそうになるその瞳がそうする様に。

柔らかな、温かい肌に肌を重ねては互いの名を呼び。

愛しさの裏に秘められた憂いと、言葉に出来ぬ感情がこの時間を奪わぬように。

腕の中で徐々に体温を上げていくアケミを、愛しいと思う。

早くなる鼓動を告げるその胸に唇を這わせては絡む視線に想いを寄せ、「それ」を掻き消す。

「ケイ君……」

「アケミ」

再び、名を呼び合い。

その唇から熱い吐息と共に声が漏れるのを聞き、しなやかな腕が私の背をなぞり、爪を立てる。

ほんの僅かにひりつく痛みが、アケミが与えてくれるそれが、喜ばしく。

彼女の目を覗き込めば、映るのは我。

憂い等、消えてしまえばいい——そう願う。

せめてこの時だけでも、と。

白い喉を上げ、仰け反るその身体をきつく抱き。

幾度も無言で口付けを交し合う。

やがて、その荒い呼吸が、寝息となるまで。

寝入った振りをしていたのは、そう望まれたように思い。

一度いつかの夜に我が開いた目に映ったアケミの涙と、それを誤魔化す言葉。

「花粉で、嫌になっちゃう、おこしちゃってごめんね」

「いや、構わぬ」

「やだなあ、目が腫れちゃう」

「アケミ」

「ん？ケイ君、もう寝ないと。明日もお迎え期待してるからねっ」

「我は——」

塞がれる唇からは、無言の願い。

僅かに感じる塩気のある、乾かぬ涙のそれ。

「ダメ、目閉じて」
「——了解、した」

言葉にならず、ただ、寝入った振りをする。

しばらく動かずに、じっと腕の中で我を見つめる視線と、唇を噛む気配と。

薄く、気取られないように目を開けると、寝言に見せかけるアケ
三。

我也同じように、夢の振りをして僅かに身体を離すと、私の背に
縋る。

寝返りに見せかけて向き直ると、躊躇う様に手を伸ばし、胸に顔を埋める。

言葉にしたくとも、見つからず。

只、気づかぬ振りを、寝入った振りを繰り返す夜。

静かに声を殺し、温かい涙がその頬を濡らすのを、我に触れようとして躊躇うその手を。

手を伸ばせば、哀しくも優しい嘘で、笑う彼女を。

——魔法が、覚めなければいいのに——

呟いた、小さな声を。

故に、目を覚ましているとされる時間にも、優しくも哀しい覆いを。

「明日も迎えに来てね？」

「無論。アケミが望む限り」

「それなら、……ずっと——」

「アケミ」

「あ、行くねっ」

出会った橋に咲く、梅。

満開を過ぎ、僅かに散り始めたその花は、只白く、陽を受けて存在を示すように。

昼でありながら賑やかなその街に消えていく彼女を見送り、また彼女を待つ。

これ以上、何かを望むのは罪であるのだろうか。

愛しいと想い、願わくばこの日々を永遠にしたいと願う、この望みは、罪なのだろうか。

人は死ねば極楽浄土を目指すという。

その弔いと、道を手助けするべく道を歩む立場の我が、願う事は。

目の前の、女人の憂いを取り除く事も叶わず。

只、心配させまいとその瞳に嘘を語らせ。

夜な夜な一人、声を押し殺し、ただ涙を流す、私の想い人。聞かれる事を優しく拒み、知られる事をその目で避け。

我が、此処に在る事が彼女の気鬱の原因なのだろうか。

「アケミ」

「今日はね、ほんと仕事楽だったわあ」

「今日は」

「ケイ君、キスして」

我の目が語る言葉を、唇を合わせ閉じる瞳で応える。

「そのままが良い。アケミ」

「ケイ君、ダメ」

「アケミ」

「……ダメ」

問いかけを、俯いて拒むアケミ。

その指先が冷たく、僅かに震えているのを隠す。

「頼む。アケミ」

「……」

「——我が居る事で、気鬱になっているのなら」

「ケイ君、……アタシ……」

目を瞑り、唇を噛むアケミ。

その唇が何事かを紡ごうと開き、また、閉じて。

無言の時が、彼女を攻め立ててしまうようで、再び我が口を開く。

「アケミ」

「ケイ君、アタシの事、好き？」

「——…無論。好きだ」

「アタシも、好き——」

互いの素振りや、何処かを好きだと言い合う事はあったが、名を呼び、想いを告げあったのは初めてだと思う。

「アタシ——…明後日には」

「うむ」

「……此处を、出なくちゃいけない」

「うむ」

「昔からの、付き合いの…アタシ、その人と——」

ケイ君に、出て行ってほしいからじゃない、と目が語る。

今までの嘘は全て無く、出会った頃の饒舌な瞳。

時折目を伏せては再び我を見て、語る。

「アタシの家は、遠く、海沿いで」

「うむ」

「——ごめん、…でも…ほんとに…」

ぐつと唇を噛む、アケミ。その瞳が微かに震え、涙が光を反射する。

それを拭ってやりたいと指先を動かすと、その手を自らの頬に持つていくアケミ。

無理やりに顔に笑顔を作り、言葉を紡ぐ。

「ごめん、いい年して泣いて。ずるいよね、アタシが…なのに」

「構わぬ」

「行かなくちゃ、行けない——」

「我に、出来る事は」

「アタシが、出来る事だから」

頬を伝う涙が、私の指先を伝う。

それでも、その目は我を見て、決意を告げている。

「ケイ君と居るの、幸せで、楽しくて」

「……」

「離れたく、なくて——でも」

「アケミにしか、出来ぬ事、なのだな」

頷いて、我の手を握る手に力を込める。

「一つだけ、頼みがある」

「なあに？」

「齡二十を数えて間もない我なれど、出来うる事があるのなら、話して欲しい」

「——十分、色々」

「我を、好ましいと思っていてくれるのならば」

言葉を遮り、告げると無言で我を見つめるアケミ。

我の手を離し、只、見つめて、その唇が開く。

「ケイ君、抱いて——」

望まれるままに、その身体を抱きしめる。

「ケイ君から、きつく、抱いて」

男の我とは違うその腕を、背を、胸を。

「愛してるって、聞かせて」

泣きじゃくるように、呼吸を荒げて切れ切れに紡ぐ言葉を。

夢中で我を求めるアケミを。

腕を伸ばし、絡めあい、二つの身体を遮るものなど何もなくなる

まで。

「お願い——」

幾度も交わす口付けと、見詰め合う眼差し。
その目に滲む涙を唇で受け、吸い。

「ケイ…君——」こめ…」
「構わぬ」

その涙を他に零さぬよう。
我が、全てを受け止められるよう。
せめて、この時だけでも、アケミが幸せであるよう。

「ケイ君——っ…アタシ…」

昂ぶる気持ちと共に、この時間の終わりを想い。
それが、永遠に來なければ、この魔法は溶ける事もないのだろう
かと、脳裏を過ぎる。

せめて、あと少し、今一時だけでもお願い。

それでも彼女に、アケミに伝えたいと。

請われた言葉は、私の想い。

魔法が解ける、終わりの時間呼び起こすその言葉なれど。

「——ケイ…君っ…」
「愛している、アケミ」

「愛してる…っ——」

「私も、一度戻り、髪を落とす」

「うん、…修行は？」

「アケミ、心より感謝している」

「あたしも——…じゃあ、次逢う時は、ケイ君坊主頭なの？」
「うむ」

これが、最後。

その言葉を口に出さぬよう。

言霊を宿して最後に導いてしまわぬようにと、言葉を選ぶ。

「そつかあ、……」

「切りたいか？」

「いいの？」

「構わぬ」

我の後ろ髪を引く、アケミ。

その指先が触れる事が、僅かに切なく、それでも温かで。

「でも、髪の毛、いいの？」

「うむ。生涯修行をして生きて行きたいのだ」

「切っちゃったら——」

「案ずるな、其れが我の願い。アケミに責任は問わぬ」
「問うても良いぞっ」

笑って。

小気味良い音と共に其処に風を感じ。

「後ろ髪を引かれる…っていうじゃない？」

「うむ」

「ケイ君の後ろ髪、もらっちゃうよっ」

「アケミが望むなら、我の望みだ」

「うれしいなあ、ありがとっ」

笑ってくれるその笑顔と目に、哀しい嘘も、優しい拒絶もなく。
出会った頃のその瞳が愛しく、魔法の終わりを想いつつも幸せを
感じる。

明日の朝、目が覚めて。

アケミが仕事に出かけ、その後に我は此処を去る。

互いに言葉には出さずに、それを想いつつも触れる事なく、手を
繋ぐ。

今までになく、気持ちがつながっている事を感じて、それが今で
ある事に思いを馳せる。

「手、あったかいね」

「体温は、保障しよう」

二人、じっと天井を見つめて、目を閉じる。

再び目を開ければ隣にはアケミと馴染んだこの風景。

「梅の花の後は、桜だね」

「うむ。風流だ」

いつか、花見をと思い。

それが叶わぬ約束なのはわかっていても。

いつかまた、この季節が巡りしとき、幸せであるように。

「桜餅、好きだなあ」

「葉の塩味が格別だ」

他愛も無い会話を、一言一言交わす。

手を繋ぎ、微動だにせず。

意味など無くても良いのだと。

穏やかな気持ちに導いてくれるこの空気に、身を任せ、残り僅かな魔法に酔い。

「そろそろ、寝なくては」

「うん、ねよっか」

「うむ。良い夢が見られるよう」

「ケイ君もねっ」

目が覚めて、それからの日常も。

全ての時が優しく、幸せなものであるように。

「それじゃ、行ってくるね」

「うむ。気をつけて」

「うん。ケイ君、——ありがとう」

ほんの僅かに間をおいて、アケミがそう言う。

「感謝する」

同じく我も、一言告げ。

じっと目をあわせ、何時もの朝の様に見送る。

何時もの様に。

そう、それで良い。

これから日々の勤めを果たし、互いの未来を歩む。

悲しむ事は、ない。

この出会いに只、感謝をし。

心の裏側に滲むこの思いも、愛しさを知ったからの事。
出会う事無ければ、知らぬままだった。

ならば、感謝を。

そして願わくば、——幸せであるよう。

これからも、幸せが彼女と共にあるよう。

一房ずつ、髪を落とす。

迷いを捨て、誓いを込める為の袈裟を羽織る。

捨てる迷い等、何も無い。

引かれる後ろ髪は、これからの我が人生を修行とする証としてアケミに預けた。

出会いへの感謝を。

——先を共に歩む事叶わずとも。

幸せを、祈る事ができるのならばそれで良い。
向き合い、話をし。

如何に大切な事を教えてくれたアケミに。

誓いを込める袈裟に、込める意は、決めてある。

我は、この袈裟に——

「雲野——」

「む」

「お、喜べっ！あつたぞー！」

よし、絶対あると思ったんだっ！

ジイちゃんが漬けた梅酒、これが旨いんだよな。

今夜はゆっくり花見しながら酒飲んで過ごせるって思うと、顔が
にやける。

雲野の膝から顔を出すうり——って、寝てたな？
ほったにいっぱい線ができてるぞっ？

「あの」

「ん？」

甕を持って走る俺を呼び止める、声。

垣根の向こうに見えるのは、理佳さん？

ふと上げた目に映る太陽が思ったよりも眩しくて、軽く目を細める。

天気は抜けるように良くて雲がほんの少し流れてて。
縁側ではうりを膝に載せたままで俺を見ている雲野。

「あ、中どうぞ」

「——っん」

垣根を回れば庭に入れる。

その入り口を手で案内して、じっと目で追う。

梅酒も沢山見つけたし、4人で分けてちよっとずつ味見するのもいいよな。

「これ、沢山作ったから——」

「ん？」

あの時以来、会ってなかった理佳さん。

明るい所でまじまじと見たこと無かったから一瞬こんな感じだったって思ってた。

「お赤飯なんだけど。良かったら」

「あ、すっげえ嬉しい！」

「うん、うちで作ったやつだけど」

「早速今夜頂きますっ！ごちそうさまっ」

そう言つて包みを受け取る。

風呂敷で包んであつて、大きな重箱のずっしりとした重みが凄く嬉しい。

これ、全部赤飯かーって思つたらもう楽しみで思わず顔がにやける。

「あ、重かつたんじゃ？良かったら茶でも飲んでいって」

縁側に座っている雲野が、うむ、と頷く。

その膝ではうりが――そろそろ目が覚める頃かな、頭がぴくつてしてる。

「あ……うん」

「久しいな、元気であつたか」

「――うん」

縁側に座つて。

見つけた梅酒の甕を側において、茶を入れる。

キレイな緑色が湯飲みに満たされていって、ふわっとイイ匂い。あの時も、こうして茶をいれて――なんて思い出して。

「運ぶの、手伝うわ」

「あ、ごめん、ありがと」

理佳さんが、お盆に載せて湯のみを運ぶ。
その後ろに立って急須を持って、縁側まで歩いて。

「あやと？」

「お、うり、目が覚めたか？」

「あい」

雲野の膝の上、体を起こしてじっと俺を見るうり。

返事すると、ふわああ、と大きく欠伸をして、振り返った反動で後ろに倒れそうになるのを雲野が抱きとめる。

——その様子を、怪訝そうにみる理佳さん。

一瞬、どうしようかって思っ

とりあえず、縁側に座るように勧めて茶を配る。

俺の分と、理佳さんの分と、雲野の分と、うりの分と。

「——」

何かを言いかけて、やめる理佳さん。

それをじっとみる雲野。

「…この間は、ごめんなさい」

何か言おうかと思って、俺が口を開くより早く、理佳さんがそう言っ

この間、っていうのは、タクと来たときの事だろう。

タクはあの直後に雲野の家に行くことになって、ババアはあのまま家に残っ

理佳さんについては、何もなくそのまま、あれつきりだった。

俺も悪かったし、謝ってもらうのは——って思ってた。

「いや、俺も悪かった。思いつめさせてごめん」

「それだけ、言おうと思って——」

側の雲野と目が合うと、薄く笑って、茶を口元に運ぶ。

その膝ではそれをじーっと見て、同じように湯飲みに手を伸ばすうり。

「アタシ——」

「では、我も非礼を詫びねばならんな」

「……初めてじゃないしっ……」

「それ以外に術が浮かばなかった。想い人ではない我に奪われては不愉快であつたろう」

とたんに、顔を赤くする理佳さん。

奪う、って、なんだ？

初めてじゃないし——…雲野、何したんだ？

「べ、別にそんなんじゃっ——」

「何があつたんだ？」

俺が聞くと、ますます顔を赤くして。

雲野は、といえば涼しい顔をしてうりに茶を飲ませてやってる。

ふー、って息を吹きかけて、そろそろと湯飲みに口を近づけて——

「つまそくに飲むなー、嬉しくなっちゃうぞっ。」

「つま——」

「お、そっか？」

「うまよー」

ひゅうつと風が吹いて、そのうりの湯のみに、梅の花びら。
ゆらゆら、とゆれて茶碗の中の緑色にぼつんと白。

「お、風流だなっ」

「おおおおお！」

じーつと茶碗を見つめては嬉しそうに頭を振る、うり。
顔を近づけては匂いをかいで、その度に顔を上げて「あー」な
んて嬉しそうに足をばたばた。

「……………」

「…あ」

ふと、それを見る理佳さんに気がついて。
見えてるのか、見えてないのかわからない。
もし、見えてなかったとしたら、何してるのかわからないだろう
し、見えてるなら、誰なんだって思うかもしれない。

「えっと」

「うり嬢だ。私の膝で茶を嗜んでいる」

「膝、で……………」

おそろおそろ、手を伸ばす理佳さん。

その指先が近づいてくるのを不思議そうに首をかしげて見る、う
り。

——見えてる、のか？

「うり」
「う？」

俺の呼ぶ声に、くるつと振り返って俺を見るうり。

真ん丸い目がじーっと俺を見て、そして理佳さんの指先を交互に見て。

「うり、理佳さん、だよ」
「いかちゃ？」

名前を教えて、また小首をかしげるうり。
見たことはあるから、覚えているとは思う。
あの日、あの時、茶を零して。
それをじつと、只黙って見つめていたうり。

「——…ねえ」
「ん？」

理佳さんが、その伸ばした指先を戻す。
そして、誰にと無く呼びかけて、また、黙る。

「——…アタシの事、からかつてる？」
「え——…」
「悪かったわよって、言ったじゃない。そうして、からかつて——
バカにしているのよね………？」
「いや、そんな——」

ぐつと唇を噛んで、俺を見て。そして、雲野を見て。
からかつてるわけでも、バカにしているわけでも、ない。
それでも「見えない」のなら、そう思うのかもしれないと思って、

なんて説明すればいいかと考える。

「いかちゃ？」

呼びかける、うり。

でも、理佳さんは振り返らない。

「何も、感じぬのか」

雲野の声。

怒っている訳でも、責める感じでもなく、ただ聞くその声。
うりが雲野の膝で、じっと見上げて、首をかしげる。

「理佳さん、——バカにしているとかじゃない。ここに、何も見えない？瑠璃様塚伝説、って——」

理佳さんに聞く。

「——知ってるわよ、だから？」

そう応えて、じっと雲野の膝を見る、理佳さん。

見えてるのかどうかはわからないけど、その視線の先には、うり。
同じように理佳さんを見る。

「最初は、信じられなくても仕方ないって思うけど、ここに居るんだ」

「あやと？」

「な、うり。おいで」

「あいつ」

立ち上がって、雲野の膝からうりを抱き上げる。

ひんやりとした手が、湯のみでほんの少し温かくなっていて、それが俺の腕を掴む。

うりは、ここに居る。

それは間違いない事実で——でも、見えないとしたら、どう言え
ばいいんだろう。

バカにされてるって思うかもしれない。

疎外感感じて、頷けないことがあるかもしれない。

それでも、ちゃんとここに、居る。

「居ないなんて言ってるわいよ。でも、そんな話」

「理佳さん、見える？」

「……」

——多分、見えてる？

もしかしたら、だけど。そんな予感がする。

「誰に、聞いたのよ」

「——え？」

「タクから？ねえ、そうやってバカにしてるわけ？」

タクから聞いて、バカにする——……？

理佳さんについて、聞いたことなんてまだ何も無い。

子供の頃からの会話なんて、数えるほどしかないけど、それを思
い出しても名前は出てこない。

「いかちゃ？」

「——」

俺の腕に抱かれたまま、理佳さんに手を伸ばすつり。
それに、無言で俯いて。

「いい加減にしてよね」

「見えるものがあるのなら信じるが良からう」

呟いた言葉に被せる様に、淡々という、雲野。

立ち上がると、うりが伸ばした手をぎゅっと握る。

「見えていない訳ではないだろう。今までに何があつたのかはわからぬ。が」

そう言つて、理佳さんを見て。

「求め、向けられる腕を見ない振りをするのは己以外を傷つける」

「——だつてっ……！」

「我は汝の過去を知らぬ。話をしていないのでな。であるが故に想像での物言い故、言葉が不適切であつたのなら謝らう」

雲野の腕の中で、じーっと自分の手を見る、うり。

その様子に目を細めて、頭を撫でてやる雲野を見ると、俺に向き直る理佳さん。

「アンタはいいわよね、悩みなんてなさそうで」

「ん——…」

「こうやつて、簡単に受け入れられて、うらやましいわよ！」

「理佳さん、——ちゃんと話しよう。でないとわからないはまだ」

多分色々あつて、それで素直に領けない事があるんじゃないかって、思つて。

なんていうのが一番いいのかなんてわからないけど、こうして謝りに来てくれたなら、そのままにしておくより、少しでも――

「なにがよ！」

「理佳さん、見えるんだろ？」

「だからっ――！」

言葉を言いかけて、また黙る。

何か言おうかと思っただけど、理佳さんが口を開くのをじっと待つ。

「アンタの……――アンタの親戚のせいよ！人のことバカにして……っ！」

「タク、か……？」

「そうよ！おかげでアタシ……こんなに太ったのだって、性格歪んだのだって！」

ぐっと手を握って、震わせて。

タクが、何を言ったのか、何をしたのか。

俺にはわからないけど、それが辛い事だったんだろうっていうのはわかる。

「いつか、アタシにも見えるなら会って見たいって思ってたわよ！それを――っ……」

「――」

「そんなこと言ったら、なんていわれたと思う！？だから夢見がちのデブは、よ！？」

「それは――……」

そんな事を言われたのか、と思って。

「ごめん……でも、理佳さん、会って見たいって思った……?」

「——聞こえるのよ!気のせいかと思ってたら、声がするのよ!」

「うりの?」

再び俯く理佳さん。

その前に、雲野が立って、うりを抱いたまま、しゃがんで。丁度、視線が同じ高さになるように。

「それならば」

「——いかちゃ?」

再び手を伸ばすうりの指先が、理佳さんの鼻先に。その指先を見る、理佳さん。

「見える、聞こえる。ならば認めるが良からう」

「だって——…そんなの見えるとか、バカに……」

「そんなの、ではない。うり嬢だ」

うん、と頷いて。

うりは、そんなの、じゃない。

「——会えたら、幸せにしてくれるんでしょう?願いを叶えてくれるでしょ?」

うりの指先を見て、呟く理佳さん。

願いを叶えてくれて、幸せにしてくれるって……話は聞いたことは無い。
でも。

「それは、聞いたこと無いけど」

「金持ちにしてくれたりするんじゃないの？」

「幸せにしてくれたのは、間違いないよ」

うん。

ここ、ジイちゃん家。

そして、うりと過ごす毎日。

一緒にいてくれる、雲野。

欲しいって願ったものは全部今俺の周りで。

夢見ていた幸せはこの日々で。

金持ちに、っていうのは――振り込まれた金でいえば、そうなんだろうと思う。

「うむ。何もせずに、幸せがある訳ではない」

「え？」

「うり嬢と会おう事で、気づき、精進したのだ」

「だって苦労なんて、した事無いんでしょ？」

そう言う理佳さんと、黙ってうりを撫でる雲野。

「俺は、うりと出会って、幸せだよ。願った未来が今此処にあつて」

「ほら、自分が不幸せだなんて思ったことないんでしょ」

「自分が不幸せだっと思ったことは、ない」

「アタシはいつも思ってるわ」

うん。

不幸せだっと思ったことは無い。

ずっと、22年間生きてきて、あることが全てで、
かーちゃんと、とーちゃんの時は、只、哀しくて。
ジイちゃんの時も、只、哀しくて。

うりが目を開けなかったあの時も、哀しくて――

「のほほんと生きてきて、不幸せだって自分思うことも無くてだ
なんて」

「気づけ」

「幸運にしてくれる子にまで出会ってさ」

「また、口を塞がれたいのなら話は別だが、いささか誘い方が宜
しくない」

「――ってっ」

かつと顔を赤くする理佳さん。
口を塞ぐ――って、なんだ？
誘い方が、…誘う…？

「ちっ、ちがつ…」

「そうか、それならば気づけ。自らにあるがままを受け入れ、そ
して精進して今の隼人がある。うり嬢がもたらしてくれる幸運は確
かなのだが、それを甘受して甘えていたわけではない」

「――アタシだって…」

「人の辛さというのは、その人にしかわからぬ。それぞれの歩み
の中で感じ、それをどう受け入れるかで道が変わるのだ」

そう、雲野が言う。

「人は、一人だ。だが、こうして話をし、時を過ごし」
「――…」

「共に歩む事で互いの価値観の元に理解を深め、共感するのだ」

うん。そう、思う。

一人だっていったら、寂しいかもしれない。

でも、別の人間で、全く完全に同じ気持ちで同じ感情でっていうのはなくても、同じこととして嬉しいっていう気持ちとかは同じでさ？

うまく言えないけど――

「良くわからないわ」

「えっと――例えば……」

上手い言葉が見つからなくて、考える。

雲野を見ると、軽く頷いてくれて。

「うまい飯が、あつてさ」

「……で？」

「俺からしたら、うまいっ！で、雲野だと、旨い、美味だ。で」

そこで一回言葉を切る。

「ちょっと、頂くな？」

「……どうぞ」

理佳さんが持ってきてくれた包みを開けて。

重箱を開けると、ふわっとイイ匂いがして、うりがぴくつと鼻を鳴らす。

「うまつ！？」

「うんうん、うり、先に一口やるからなー？」

「あー」

嬉しそうに口をあけて、鼻息荒くして俺が赤飯を口に入れてやるのを待つうり。

小さな鼻の穴が目一杯開いては閉じて、ヨダレが…って、はいはいっ！

「うまあああああ！」

「そーかそーか、うまいかつ！」

「うま！うま！」

満足そうに口いっぱい頬張って（口から零れないように手で押さえて）うんうんと頷くうり。

うん、そういう事なんだ。

幸せでさ、でもその表現って人それぞれ。

だけど、幸せだっていう気持ちや、うまいっていう気持ちは同じで。

「……」

「うりだと、こんな感じで。でも、皆幸せなのは同じでさ。それが、一緒だから何倍も嬉しくて」

「……うん」

「辛いつていうのも、きつと人それぞれで、…って、ごめん、うまくまとまらない」

うまそうに赤飯を食ううりを、見てたら俺も腹が減ってきた。ほんのり遠くの空が白くなって、もうじき夕暮れなんだろう。

「なんとなく、…わかったわ」

「ありがとう」

「どうして、ありがとう？」

「——なんでだろ。なんとなく。わかってくれて、かな？」

だよな、なんでだろう。

なんだか嬉しくて、ほっとして、それで。

ありがとうって、口に出て。

「ならば、隼人」

「ん？」

「我は夕餉を所望する。其れなる旨そつな食物を見せられては腹も減る」

「ん、だなつ。理佳さんも食ってきなよ、梅酒もあるぞ？」

たつぷりある重箱の中の赤飯は、三人でわけても多い位。

その下の段にはあれこれおかずが入ってて、これがまたうまそう。今日は天気も良かったし、このままここで晩飯で、梅酒飲みながら花見をして、っていいよな？

「うり、これ理佳さんくれたんだぞー」

「いかちゃ？」

「うんうん」

「いかちゃ、あいやとー！」

理佳さんを見て、にこーっと笑う、うり。
その声を聞いて、

「——喜んでくれて、嬉しい」

「いかちゃ、あいっ！」

「…え？」

ちっちゃい手のひらに握った赤飯を一つ、理佳さんに手渡すうり。

「…ありがとう」

「うまよー」

顔中あちこちにいろんなものをつけて、うりがにかーっと笑うのを見て、思わず俺も笑う。

ちよつと照れたみたいな顔をして、理佳さんがそのほったたのこ飯粒やらを取ってやり、それにまた嬉しそうにうりが笑って。

「なんか、いいわね」

「ん？」

「…こついの、ひさしぶり」

そう言って、赤飯を食べる理佳さん。
なんとなく嬉しくて、うん、と頷く。

「いかちゃ、くくし？」

「くくし？」

「理佳殿、つくしを採りに共に後日如何か？」と

雲野がうりの言葉を通訳する…ってっ！

そんな流暢なうりって、想像したらちよつと笑えるぞっ。

「つくし採りに行くの？」

「バアちゃんともう何日かしたらな。良かったら理佳さんも一緒にどう？」

「うん、行く」

「うりも！」

「うんうん、一緒に行こうなー？」

うりの頭を撫でながら、そう言って、理佳さんにも頷く。
穏やかに笑みを浮かべて笑ってる雲野も、梅酒を一杯飲んで頷いて。

もうちよつとあつたかくなって、つくしが出る頃になったら皆で摘みに行くんだ。

初めて過ごす春な訳で、お祝いで。

そう思うとほんとになんていうか気持ちがふわつとする。

「タケノコ、好き？」

「たけおこ？」

「タケノコ。美味しいのよ」

「おおおおおお！」

理佳さんが、うりに話しかけて。

うりの反応が面白いらしくて、くすつと笑いながらまたご飯粒をとってやってる。

「アケミさん所の山で、毎年沢山貰うから、そしたらおすそ分けするね」

「——アケミ、さん？」

杯から口を離し、じつと理佳さんを見る雲野。

「うちのおバアちゃんの幼馴染。駅前でお弁当売ってるわよ」

「あ、あの時居た人理佳さんとこの知り合いなんだ」

「そうか」

「あの人おこわつくるの上手だから、よく分けてもらっの」

うん、確かにうまかった。

雲野と初めてこっちにきたとき、駅で弁当買ったのを思い出す。

「いくちゃ？」

「ん？」

つんつん、と雲野の袈裟を引っ張る、うり。

「どうした？」

と、俺が問いかけて――

「えぶちっ」

じつと雲野を見つめていたうりが、くしゃみ。

つーっと鼻水が……って、それを袈裟で拭ってやる雲野。

「うり、寒いか？」

「うり嬢の額にも花びらが。是が鼻に乗ったのであろう」

「うじゅー」

「あ、そろそろ帰るわ」

理佳さんが立ち上がる。

「では、我が送り届けよう」

「んじゃ、俺風呂の準備しておく」

「送ってくれて、ありがと」

「気にするな。旨い飯であった。感謝する」

「――あんたって、…変わってる」

「そうか」

しばらくぶりの事だ、と思い、言葉を返す。
するとまた、黙る。

「ずっとあそこにいるの？」

「隼人にうり嬢が望んでくれる限りは」

「あんたの家って、どんなかんじ？」

「都内にある。寺だ」

他にも道場なりがあるが、と呟いて。

夏とは違い、夕暮れともなれば吹く風は冷たい。

「こんな田舎に居て、つまらない？」

「楽しい。幸せとを感じるが、そうではないのか？」

「そりゃ…」

と、また口を尖らせて黙る。

そのまま数歩歩き、何本目かの電信柱を過ぎるあたり。

気を使わせているのやもしれんと気がつく。

「すまん。気の利いた会話というものが得意ではないのだ」

「あ、うつん。…別に、…ただ…」

「ただ？」

「なんでもない。…うつん…」

「寒いのか？」

肌寒い風を思い、問う。

が、その問いに俯くと、やや不機嫌そうに答える。

「デブだから」

「関係ない」

「脂肪厚いから、寒くなんてないわ」

「女人はそうでなくては困る。第一、デブという言葉が当てはまるようには思えんが」

そう言うと、顔を上げて我をじっと見る。
が、また俯く。

「……ありがとう」

「何を言われたのかは知らぬが、自ら思い悩む事は無い」

「デブ、イヤじゃない？」

「女人はふくよかなほうが良い」

「袈裟着てるくせに」

「それもそうだな」

そしてまた、言葉もなく歩く。

見上げる空には幾つか星が瞬き始め、適度に距離を置いた電灯の明かりが道を照らす。

気の利いた言葉、等は未だ体得していない。

今までそれを望んだ事もなかったのだが、それも必要なものなのだろうか。

「…ごめん」

「ん」

「嫌な事ばかり、言ってる」

「気にするな」

林の角を曲がると、家が見える。

「あれ、うちだから。ここでいいわ」

「了解した」

「…ありがと、…また、遊びにいつでもいい？」

「うむ。隼人もうり嬢も喜んで迎えるだろう」

「あんたは？」

「む？」

と、答えを待たずに走り出す。

「またね」

「…うむ。又」

既に離れた所から聞こえてくる声に、返事を交わし。

電灯の下を走っていく姿を見送る。

遮蔽物の無い広い畑道。

その姿が建物の中に消えるのを見届けると、帰路に着く。

所々に咲く梅が、下弦の月の光に白い。

一人、夜道を歩きながら只其れを見つめる。

うつすらと細く、光る月。
それは、儚げで。

只一人、立ち止まり、其れを見上げる。

目に刺さる強さは無く、柔らかな其れ。
伸ばした腕を、袈裟を平等に照らしては地面に影を作る。

久方ぶりに聞く名に、この季節を思う。

「ケイ君、よね？」

「…如何にも」

「覚えてる？」

「確か以前、この橋でアケミと共に」

声を掛けて来たのは、妙齡の女性。

髪を落とし、二度目の春。

何気なく梅の花を眺めて、ふと立ち止まった所に、呼び名。

久々に紡がれるその言葉に、記憶を辿る。

「うん。…元気だった？」

「うむ」

「その後、どうしてるかなって思ってたら、偶然見かけて」

そう言つて、微笑む。

同じように笑みを返し棧橋にもたれるように、荷を降ろす。

「アケミの事——」

「ん？」

言いかけて、言いにくそうに口をつぐむ。

耳に、脳裏に優しく残っている名前が、この場所で、彼女を知る人の唇からこの時期に紡がれる事で、なんとも言い難い気持ち呼び起こす。

が、それが不愉快などある筈も無く。

「きつと、色々言わないでいたんじゃないかなって」

「——」

「ほんと、今更氣にする事なんてないのに……」

「彼女は——アケミは、不幸なのか？」

久方ぶりに、口に出す彼女の名。

目を瞑らずとも鮮やかに蘇る記憶の中の彼女。

今も、思い出すのは「うれしいなあ」と笑うあの表情。

時折見せていた寂しげな顔が、時間と共に幸せな記憶になっていくのは、忘れないからではない。

「ケイ君の事、好きだって。でも——」

続きを、催促して良いものかと考える。

それは、アケミが望む事だろうか。

「アケミ、お人よしで——バ力で——」

「今、不幸なのだろうか」

それでも、今が不幸なものであるのなら。

何が出来ると保障は出来なくとも、何かしらの役に立てるのなら。

「ごめんね、言っているのかわからなかったんだけど、私はケイ君に言ったほうがいいと思うから——」

「——心遣い、感謝する」

「アケミね、家で、いらない子って言われてたらしくて——父親も誰かわからないって……それで、——出て、此処に来ただけ……」

一言、一言、言葉を選んで我に告げるのを聞く。

アケミが語らなかつた過去をこうして聞く事への罪悪感が皆無だといえは嘘になる。

しかし——

「その、家で借金してて……その先の息子さんが病氣らしくて——」

アケミ。

名を、胸中で呟くが、返事は無く。

黙りこんだ我を見て言葉を止める彼女に、視線で先を促し。

「身の回りの世話兼ねて嫁入りすれば、借金も——……って話みたいで……」

「家を出て、連絡が？」

「うん、ずっと無かつたらしいんだけど手紙来たって……」

「アケミは——」

「幼馴染だったこともあるし、優しくしてくれたことも、あるから……って……」

拳を握り締める。

あの時、多くを語らなかったアケミ。

あの夜に、我に何も頼らず、言わず、一人泣いて。

又何時ものように、と見送ったあの朝に、我は――

「ケイ君は？って、聞いたらね」

「――」

「大好きだ、って。本当に今が幸せって」

「我に――」

話さずにいたのは、アケミの気遣い。

頼らず、引け目を感じさせぬように、何も言わず、悟らせず。

後の我を思い、知る術も無いようにと――只一つの想い出のみを残せるようにと。

「理由は、言わなかったんじゃないかって思ってたんだ……今日逢えて、良かった」

「感謝する」

「ううん。アケミの事、恨まないで居てくれたんだってほっとした」

「恨むなど」

「ケイ君、お坊さんだったんだね。前は髪の毛長かったからわからなかった」

「うむ――……アケミは、不幸なのだろうか」

想像するしか、出来ない。

どのような過去があったのかを今聞き、そして思い。

薄明かりの漏れる窓際で、話した過去を。

風呂上りに爪を塗る彼女を見つめて、笑いあった姿を。

今、彼女はどうしているのだろうか。

「最後の日に、話したの」

「如何に」

「そんな、今更関係ないじゃないって。今幸せなら、ほっとけばいいじゃないって。そしたら——あたしが、できる事だから、って」

彼女なら、アケミなら、と頷く。

我にもそう言って、決意を告げたあの夜。

「今更いいように使われてって、ケイ君は？って言ったら、泣くんだよ…唇噛んで、笑い顔で、それで——」

彼女の言葉が、私の脳裏に映像となり、その空気すらも感じられるほどに、浮かぶ。

手を伸ばしても、その映像の中に我は存在せず。

きつく抱きしめたその肩に触れる事も叶わず、ただその風景を眺め。

右の掌で、顔を覆う。

冷たい其れが、額の熱を僅かに奪い。

瞼の裏に浮かぶ彼女が揺れ。

「裏切ったとかじゃ、ないからね——アケミは——…」

「わかっている」

「アケミ、バカだよな——…」

無理やりに笑顔を作り、それでも漏れる涙を、拭ってやりたくて。

震える小さな肩を、温めてやりたいと切望するも、既に此処に彼女は居ない。

あの時に、我は間違えたのだろうか。

嫌だ、と強く引き止めるべきだったのだろうか。

それとも、無理にでも話を聞きだすべきだったのだろうか。

「ケイ君と逢えて、一緒に居られて、最高の想い出が出来たって」「アケミ——…」

「あたしにしか出来ないって、それでも、幸せだったからって…」
「彼女は、今は幸せなのだろうか。それとも」

今出来る事は、何だ。

過去を悔いて立ち止まる事が一番相応しくない。

省みて、その上で考慮し、出来る最善の事は、何だろうか。

今の我に出来る、最善を尽くさねば。

「幸せだったから、これからきつといい事あるって、言ってた」
頷く。

彼女の口調から、アケミの言葉を思い出す。

まるで、言う彼女がそのまま見えるかのように脳裏に浮かんで、消える。

「ケイ君も、幸せになってくれたらいいなって。一生忘れないって」

「仮に、——我が、アケミを迎えに行くのなら」

彼女の背負う責任を、受け持ち。

彼女を今再び連れ戻す。

それは、彼女に幸せな事であろうか。

「——きっと、アケミは、戻れない」

その答えが返ってくるのを予想していたとしても、口に出さずにはいられずに。

一度決意し、人と関わり。

その上でさらに誰かを巻き込んでという事を望むとは、考えられず。

「ケイ君が、引き止めなかったのは間違ってるよ」

「——すまない」

「ううん。引き止められてたら、多分どうしようもなくて。一緒に居たくて、それでもそうできない理由があつて、責任があつて。板ばさみになつてると思う」

口を開きたい、が、言葉が出てこない。

それが、最善だったのだろうかと思ひあぐね、それでも尚、術を探り。

「だから、ケイ君が見送ってくれた事が、アケミに一番優しくつたんじゃないかな。ケイ君だから、自分が出て行くのを許してくれて……ワガママ言えたんだって思う」

「感謝する」

「バカで、お人よしで、それでいて難しい事考えるんだから……借金だつて、アケミには関係ないのにな——」

アケミだから、そうしたのだろう。

それが最善の自分の出来る事だと、考えて。

後に後悔をして生きる事の無いように。

「不思議だね。私、今日ケイ君に逢えて良かった」

「我也、感謝している」

「アケミが出て行っってから、ずっとわからないこととか、もやもやしてたんだけど——こうして話してるうちに、なんかわかった気がする」

「我也、同じだ。知る事が出来て良かった」

知らぬままであるはずだった事を、知り。

彼女の思いや、気持ちを
知る事が出来た。

時折、密かに浮かんでは行き場の無い後悔は、春の空に溶け。

それが最善だったのか、今でも思い悩めども。

彼女の気鬱を一つでも和らげる事が出来たのならば。

私の選択が、少しでも彼女に優しいものであったのならば。

「いつか——アケミに逢う事があれば」

「ん？」

「伝えて欲しい。——我也幸せであつたと」

「うん、約束する」

「そして、もう一つ」

首をかしげる彼女。

時刻は夕刻を前に日暮れの頃。

あの時の出会いを思い出し、もしまた彼女に出逢う事が出来たのなら。

「何時でも構わぬ。もし不幸せなら、寂しいのなら後ろ髪を引け

と——次の我俣には、我を望めと」

「うんっ、伝える！」

「幸せであるのなら、其れで構わぬ」

「ケイ君、ありがとね」

「——・・・あー！」

「ん」

遙か先から微かに聞こえる声。

ぱたぱた、と軽快な足音を立てながら走ってくるのは、うり嬢と隼人。

「うり、早いつ！」

「うしししっ」

嬉しそうに笑って、後から追いついてくる隼人に向かって腕を振る、うり嬢。

ほんの少し冷たい風の中で、頬を赤く染めて息を整える。

「迎えに来てくれたのか？」

「おうっ！帰る頃には風呂がいい感じだぞっ」

「いくちゃ、こえ！」

そして、我に差し出したうり嬢の手。

ゆっくりと開かれた掌にのっていたのは、梅の実。

先程の梅酒の中のものであろうと推測する。

「我に？」

「う」

「うり、食っても大丈夫かなー？食いたっていうんだけどさ、酒だろ？」

「うま？あやと、こえうまーって。いくちゃ、いー？」

「ふむ。では、先ずは一口。そして風呂上りにじっくりと頂くとしようか」

そう言っつて、うり嬢の手から梅の実を受け取り。
なるべく三等分出来るよう、力を指先に込める。

「その前に、うり嬢。手を」

「う？」

見せてくれる掌からは梅酒の香り。

僅かに残った液体が月を受けて光るのを、そのまま吸う。
そして、そこに先程分けた梅を、乗せる。

「では、これを」

「おおおお！」

「そして、隼人」

「お」

「是を。実に出来の良い梅酒だ」

「だろっ？」

隼人の掌にも一つ分けて、残りを我が。

口に含まと、実に良い香りが鼻腔をくすぐり、それでいて程よい甘味が心地よい。

隼人の祖父が作られたと聞いているが、是非一度逢つて見たかったと思う。

さぞかし沢山の素晴らしい話が聞けた事であらう。

「うまあああ」

「うまいっ！冷たいのがまたいいなっ！」

「うむ。旨い」

幸せそうに頷くうり嬢と、同じ様に笑う隼人。
その傍らで我も頷くと、隼人が手を出す。

「ん」

「んじゃ、あそこの電柱まで、じゃんけんしようぜ」

「あいっ！」

「さつき、家の外のところまでうりとやってたんだよ。グーで勝つたら、三步、パーで勝つたら五歩、チョキで勝つたら二歩なっ！」

そう言つと、一度だした右の拳を背後に仕舞い込む隼人。

「せーのっ！」「えーの！」「よし」

掛け声と共に、掌を出す。

「あつたー！」

私の握つた拳と、隼人のそれと、うり嬢の開いた掌。
嬉しそうに飛び跳ねると、笑つてじつと前方を見て。

「いーくーちゃっ！」

「ん？」

「次は俺が勝つぞっ!」

我の名を呼びながら、一歩ずつ前に五歩進むうり嬢。
そして、又手を高く上げて、勝負の開始の合図を送る。

「えーのっ!」「せーのっ!」「うむ」

うり嬢の握った拳と、我と隼人のチョキ。
どうやらまた負けてしまったようだ。

「うしししっ」

「うり、強いなー!」

また、嬉しそうに笑うと、すうつと大きく息を吸い込んで。

「あーやーとっ!」

今度は隼人の名を呼びながら、三歩。
その様子に思わず顔が緩み、隼人を見ると勝負開始の合図を送ろうと、手を上げて。

同じ様に小さな拳を出し、頭上に掲げるうり嬢、の手がしっかりと開いているのは次の手なのだろうか。

「よしっ!ただいまっ!」

「たじやいあっ!」

「今帰った」

「おかえりっ!」

「おじゃりー!」

「お帰り」

挨拶を交わし、玄関で迎えてくれるえこ殿を抱き上げる。

柔らかな毛が指先に温かく、その小さな額を撫でると空を仰ぐ様を、気高いと思う。

細い尻尾を我の腕に絡ませて喉を鳴らす。

「うつしや、風呂はいろーぜっ!」

「あいあ!」

「では」

長い廊下を抜け、風呂を目指し。

開け放した戸窓から入ってくる風が静かだ。

「おおおおおおお!」

「ん?…お!」

先に湯殿に向かった二人が発する驚きの声。

我も、袈裟を脱ぎ、湯殿へ向かうと。

「是は、美しい」

「だろっ!」

「あー」

丁度湯気に煙り、光の輪を纏うような月の光に白く輝く梅の花。

それが、風が吹くたびにはらはらと夜空を舞う。

風に乗って行くその先には、桜の木が、凜として。

「実に良い趣味をされていたのだな」

「ん？」

「梅を楽しみ、そして桜とは」

「ジイちゃんが良く言ってたなー、梅に楽しませてもらって、そして花が散ったら桜が楽しませてくれる。——その後は、夏が来て、隼人が来てくれるって。」

そう言つて、少し照れたように笑う隼人。

「すげえ俺、嬉しかったんだ」

一度、窓の外を見て。

そしてまた再び、我とური嬢を見る隼人。

「我も、嬉しい」

「ურიもー」

「ありがとなっ」

風呂上りの火照った体に、夜風が心地よい。

其れが、こうして月夜に梅を眺めつつの一杯となれば、それは殊更だ。

「うまよー」

「いいぞいいぞー！踊るかー？」

「おおおお！」

「では、我が笛でも吹こう」

「あるのかっ！」

隼人が「賽銭箱」と言った其れから、愛笛を。此処暫く口をつける事が無かったが手入れは怠っていない。今宵の様な気分の良い夜に、その音色は如何に冴えるだろうか。

「おおおおおお！」

一息、通す。

その音色にうり嬢が目を丸くして声を上げる。喜んで頂けた様で、実に嬉しい。

「すっげえ！」

隼人も手を打ち、うり嬢と顔を見合わせ。

やはり、感情を表して喜んでくれるというのは、嬉しい。

静かな夜に笛の音色が響き渡り、えこ殿が踊るうり嬢の足元にじやれついているのが見える。

吹く風も無く、月の光に星明り。

反射しつつも光を受けて柔らかな梅の花と、それを広げる枝。

そして我を家族と迎えてくれるうり嬢、えこ殿、隼人。

この上なき美酒があり、この穏やかな夜。

実に、幸せだ。

夜の空に吸い込まれ、溶けていくかのように思える音色からするに、笛も喜んでいる事であろう。

一節を終え口から離し、傍に置く。

「すつげえ良かった！雲野やるなー！」

「いくちゃ、やうなー！」

「喜んで貰えて何よりだ。私も、嬉しい」

そして、再び杯に隼人が継ぎ足してくれる酒を受ける。

微かな琥珀色に、舞い落ちる花卉に顔が緩む。

「うめしゅー、んまー」

「うり、飲みすぎるなよー…って俺もだがっ！しかし、なんてゆーか、いいなー」

「うむ。実に心地よい酔いだ」

赤い顔をして梅の実を齧るうり嬢と、再び乾杯と杯を傾ける隼人。えこ殿には先日ミヨコさんが持たせてくれたマタビと、実に今宵は良い夜である。

隼人の祖父殿の梅酒は実に旨く、熟成されたその香りは口をつけるたびに新鮮であり、心を浮かれさせるに十分を以ってしても尚余りある。

そう、時を経て。

熟成される事で、作られるものがある。

新鮮な其れもまた良いものであるが、それが時を経て尚深いものになり。

いつか、この想いは消えるのだろうかとかアケミとの日々を想ったあの午後。

かつて抱いた気持ちも、時を経て、過去になるのだろうか。

思い出すたびに僅かに胸に染みる痛み。
ふとすると浮かんでは漂う後悔の念。

——それは、楽になると言う事なのだろうか。

彼女が与えてくれた感情が消える。

共に過ごした時間は幻のように実感を伴わなくなる。
かつて、この腕に抱いた温かな温もりも、その声も。

そう、最初から知らなければ「無」であつた事。

しかし、知つた事を後悔等しておらぬ。

むしろそれ故に与えられる痛みがあるのなら、それを感じるたび
に出会えた幸せを思うことが出来る。

たとえ今彼女の口から紡がれる名が我のものではないとしても、
彼女が今も「うれしいなあ」と笑っているのなら其れが良い。

出来るのなら、彼女の周りを包む全てが、彼女に優しいものである
ように。

一人で泣く事など、無き様に。

声を殺し、縋る手を自ら戒める事無く、心安らかで在る様に。
寒い帰路を一人歩く事無き様に。

ただいまと戻る場所に、おかえりと迎える場所が彼女に幸せをも
たらず様に。

「いやー、花はキレイだし酒はうまいし、幸せだなっ」

「しゃあせつ」

「実に、幸福である」

我は、実に幸福である。

こうして共に時を過ごし、先の未来を楽しみに思うことが出来る家族がいる。

アケミを思い出して感じる感情は、彼女が与えてくれた貴重な時間である。

今、彼女は幸せであるだろうか？

与えてくれた全てに、我が報いる事は何であろう。

未だ其の答えは出ず。

故に我は、生涯を修行とし、生きていかんと欲する。

願わくば、我を包む幸福感が同じ様に彼女を包んでくれる事を。

願わくば、我も誰かを幸せにすることが出来る事を。

我に与えられたこの幸福に報いる事が出来る事を。

——幸せを感じる事が出来る術を。

「雲野、酔ったかー？どした？」

「いくちゃ、うあ？」

「いや、余りにも良い夜なのでな」

「確かにっ！ほんつといい夜だっ！…って、毎晩俺良い夜だなっ」

そう言って笑う隼人と、うり嬢。

確かにそうだ、と我も笑い。

「どしたー？なんかあるなら、聞くぞっ？」

「うむ」

「あいっ！」

頷くと、笑顔で我の肩を叩く隼人と、うり嬢の頭を撫でる。

「言いたくなったらでいいから、言ってくれよな？」

「うりもー！」

「無論」

そう言っつと、やや照れた顔でうり嬢を見つめ、そして我を見て。

「家族だもんなっ」

と、我の肩に手を置く隼人。

「うむ。そうだ」

ひゅう、と風が吹く。

その風は温かく、そして風に舞う花弁は白く、美しく。

実に、今宵も良い夜である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7227b/>

うりと夏休み～雲野～

2010年10月20日20時01分発行